

研究経過報告

杉江修治

1. 集団問題解決における集団構成の効果に関する研究；これはここ数年間個人研究のテーマとして取り組んできた問題である。昨年やっと2編の学会発表をすることのできる成果を得ることができた（「集団問題解決における集団構成の効果に関する研究」教心20回総会、「同、Ⅱ——解決ストラテジー指定条件下での検討——」グループダイナミクス学会26回大会）。この2編は早い機会にまとめたいと考えている。

2. 集団問題解決に関する共同研究；これは塩田芳久名誉教授を中心とした研究グループで行なってきたものである。ここで個人研究におけるような実験室的な研究よりは、教育現場と密接に問題意識の関連した一連の研究に従事する機会を得てきたことが、私自身の学問的な構えに大きな影響を及ぼしてきている。昨年1976年に市川千秋、藤田達雄と行なった研究を実験社会心理学研究18-2に載せた（「集団問題解決における解決ストラテジーの研究Ⅰ」）。続編の「同、Ⅱ」は続いて本年中にまとめる予定でいる。他に、昨年2月に行なった実験結果2編を塩田勢津子、梶田正巳と学会に発表した（「集団課題解決における解決ストラテジーの研究Ⅳ」グループダイナミクス学会26回大会、「同、Ⅴ」日心42回大会）

3. 体育集団に関する実験的研究；本研究は中京大院生伊藤三洋との共同で行なったものである。集団的スポーツにおけるグルーピングの効果、とくに成員のパーソナリティーを基準にしたものについて2つの実験的研究を行なった。これに関しては4編の学会発表を行なった

（「集団的スポーツにおけるグルーピングの効果に関する研究」体育学会29回大会、「同、Ⅱ」体育学会東海支部26回大会、「集団的スポーツにおけるチームの発達に関する研究」体育学会29回大会、「同、Ⅱ」体育学会東海支部26回大会）。

4. 学習指導に関する研究会；昨年も現場教師との学習指導の問題を中心とする研究会を、塩田芳久名誉教授、梶田正巳助教授らと数回にわたって持った。現場の持つ諸問題を肌で感ずることのできる貴重な機会であった。また教師の指導上の工夫で、組織的な検討への興味をそそのものもあり有益なものであった。

尚、昨年は、一昨年につづきこの研究会とは別に、幼・小・中・高一貫教育をめざした広島県豊高校区の活動に再び参加できたことも喜びであった。町ぐるみの教育の取り組みに接して、教育の諸問題の底の深さと広がり益々強く感じてきてきている。

5. その他の研究活動；以上の他に若干の論文がある。

梶田正巳編「教室学習の理論と実践」（黎明書房、本年刊行予定）の章2つを担当した。これ迄8年間、数多く教育現場に接し、また一方で教育、教育心理に関連した研究書を読んで感じてきた諸問題等を自由に書かせていただいた。担当した章は第2章、教授目標と学習課題、第8章、教材研究の進め方。

その他に、展望一編を共同執筆した。

発達と学習研究の展望と課題 教育方法研究年鑑'79年版、（梶田正巳と共著）

研究経過報告 —昭和53年4月～54年8月—

後藤宗理

学生であった頃、紀要を受け取ると最初に目を通したこの欄に、いざ自分で書くとなると、何を書けばよいのか少々戸惑っている。本紀要第17巻に述べられたようなねらいとはややズレているかもしれないが、以下に、助手着任以来現時点（本紀要原稿締切時）までの研究活動を整理しておきたい。

1. 発達心理学の枠組の中で社会化過程を検討していくとき、アプローチのしかたとして、基本的メカニズムを検討していく方向と、具体的な現象について考察して

いく方向とがあると考えられる。修士論文以来、社会化の基本的メカニズムとしてほめことばやうなづきなどのいわゆる社会的強化をとり上げてきた。具体的には、それを幼児に与えた場合、彼らの行動がどのように変化していくか、その強化が有効に作用する基本的条件は何かということ明らかにしようとした。社会的強化の特質は人が人に与えることにあると考え、これまで、与え手と受け手の人間関係に注目した実験的研究を行ってきたが、このうち博士課程後期3年修了時に投稿した論文